

テレビドキュメンタリー

Documentary

本賞 『メルトダウン File.3』 & **優秀賞** 『黒い雨』

広島、長崎から福島へ

中村 直文 鈴木 章雄 井上 恭介 吉田 喜重

本賞を受賞した『NHKスペシャル メルトダウン File.3 原子炉“冷却”の死角』(NHK)の制作統括中村直文さん、ディレクターの鈴木章雄さん、優秀賞を受賞した『NHKスペシャル 黒い雨～活かされなかった被爆者調査～』(NHK 広島放送局)の制作統括 井上恭介さんにテレビドキュメンタリー番組審査委員長の吉田喜重さん(映画監督)が二つの番組に共通する原子力という視点で話しを聞いた。

吉田 受賞、おめでとうございます。

本賞の『メルトダウン』は福島原発の事故、優秀賞の『黒い雨』は広島原発を扱っており、この二つの番組に共通しているのは原子力による被害です。このあいだには68年の隔たりがあっても同じテーマという視点から、この二つの番組の制作者の方からお話しを伺いたいと考えました。

『メルトダウン File.3 原子炉“冷却”の死角』について伺いますが、受賞したのはシリーズの第3作目です。File.3に至るまでの経緯をお話していただけますか。

中村 メルトダウン File.1は2011年12月に『福島第一原発 あのとき何が』というタイトルで放送しました。地震と津波が発電所の電源を喪失させた経緯と、最初に水素爆発を起こした1号機の核燃料がメルトダウンし、水素爆発に至るまでの状況などを伝えました。File.2は2012年7月に『連鎖の真相』として、「最大の放射性物質の放出源」と見られながらその解明が進んでいない2号機と3号機を検証。重要な

局面で動かなくなる安全装置の存在や、危機に際して外部の支援する体制がない、原発をとりまく安全の根幹に関わる問題を伝えました。

でも、最初からシリーズ化していく意図を持って立ち上げた訳ではないんです。取材、制作して行くうちに問題が次々と見えてきて、到底1回では取まらない感じになってきました。また、視聴者からもこの問題を追及して欲しいという声が多く寄せられまして、結果的にFile.3まで繋がりました。

当然、メルトダウンシリーズは3.11をきっかけに始まっていますが、取材、制作チームの母体は2007年の新潟県中越沖地震の際の柏崎刈羽原発事故を取材したメンバーなんです。

鈴木 取材をしていると、国や東京電力、あるいは専門家もそうですが、高い専門性を持った人たちというのは、自分たちの知識に取材者が追いついてきているかどうかを計っていると感じます。「知らないのなら、ここまでしか話さない」というような。

中村 原発というのは非常に複雑なメカニズムで動いているので、知見を持った人たちを集めてチームをつくるというのが第一歩でした。鈴木は柏崎刈羽原発事故のときはチームに入っていなかったのですが、それとは別に原発解体というテーマで取材をしていました。

吉田 柏崎の事故の取材活動をとおして学習してきたことが、今回の福島原発事故に生かされていることは興味深いですね。テレビの報道は次つぎと起こる出来事を追うようにして、いわば受身の姿勢で取材しているだけに、柏崎の取材活動への反省が原点だったと伺って、この作品が生まれるべくして生まれた背景が良く理解できました。

ドキュメンタリーでの再現ドラマ

吉田 審査の場で熱心に議論された問題について、お尋ねしたいと思います。番組の中では再現ドラマとCGが使用されているのですが、審査委員のあいだにはドキュメンタリーである以上、こうしたフィクション的表現を避けたいという気持ちがあり、おのずから評価は低くなる。今回の場合も否定的な意見の委員もいましたが、福島原発問題を取材することの困難さを乗り越えるには再現手法しかありえないと、多くの審査委員が判断したのも事実です。

原子炉爆発に関するすべての情報、データは、事故を起こした当事者である東京電力しか知りえないかぎり、自由に取材することは難しい。メルトダウンの瞬間の状況を担当者にインタビューしても、答える範囲は会社によって制限されている。それを追及するには再現ドラマ、CGの手法しかなかったと私自身は思っているのですが、みなさんの判断をお聞かせください。

中村 フィクションが入るという抵抗は、私たち自身の中にもあります。

現場をロケするというのがドキュメンタリーの鉄則ですが、今回は、現場に入れない。近づけない。さらに証言者も中々出てこないという様々な制約がありました。でも、制約があるからといって、それを伝えられないままでいいのか、と自問自答し、それで再現ドラマやCGを駆使しようと考えました。

取材班が精緻に情報を取ってきて、レバーの1個1個にも相当詳細に情報をとったうえで再現しています。社員が叫んだり、動作確認をしたりしていますが、あれも、福島第一の関係者やほかの原発の関係者への詳細な取材に基づいて作っています。

映像化したことで「あの現場で何が起きていたのか」ようやく事の本質が理解できたという視聴者の方々がたくさんいたので、無駄ではなかったかなと思っています。

吉田 原子力の脅威を視聴者に理解してもらうには、あの方法しかなかったにしても、それを再現し撮影するときの迷い、抵抗があったと思いますが、如何ですか？

鈴木 中央制御室については、事故のときに運転していた人やかつての運転員に取材をして、どんな状況ならどの計器を見るですとか、この計器がこの数値を表したらかなり危険であるとかは、もちろん分かったうえで演出しました。でも、極めて複雑なので、俳優さんが発電所の仕組みを理解してそれを演技に落とし込むというのは難しかったようです。どのレベルの技術力の人であれば、どういう認識をもつのかということを引き出すのは大変でした。

中村 原発というのは非常に複雑なメカニズムで動いているので、知見を持った人たちを集めてチームをつくるというのが第一歩でした。鈴木は柏崎刈羽原発事故のときはチームに入っていなかったのですが、それとは別に原発解体というテーマで取材をしていました。

吉田 柏崎の事故の取材活動をとおして学習してきたことが、今回の福島原発事故に生かされていることは興味深いですね。テレビの報道は次つぎと起こる出来事を追うようにして、いわば受身の姿勢で取材しているだけに、柏崎の取材活動への反省が原点だったと伺って、この作品が生まれるべくして生まれた背景が良く理解できました。

ドキュメンタリーでの再現ドラマ

吉田 審査の場で熱心に議論された問題について、お尋ねしたいと思います。番組の中では再現ドラマとCGが使用されているのですが、審査委員のあいだにはドキュメンタリーである以上、こうしたフィクション的表現を避けたいという気持ちがあり、おのずから評価は低くなる。今回の場合も否定的な意見の委員もいましたが、福島原発問題を取材することの困難さを乗り越えるには再現手法しかありえないと、多くの審査委員が判断したのも事実です。

原子炉爆発に関するすべての情報、データは、事故を起こした当事者である東京電力しか知りえないかぎり、自由に取材することは難しい。メルトダウンの瞬間の状況を担当者にインタビューしても、答える範囲は会社によって制限されている。それを追及するには再現ドラマ、CGの手法しかなかったと私自身は思っているのですが、みなさんの判断をお聞かせください。

中村 フィクションが入るという抵抗は、私たち自身の中にもあります。

現場をロケするというのがドキュメンタリーの鉄則ですが、今回は、現場に入れない。近づけない。さらに証言者も中々出てこないという様々な制約がありました。でも、制約があるからといって、それを伝えられないままでいいのか、と自問自答し、それで再現ドラマやCGを駆使しようと考えました。

取材班が精緻に情報を取ってきて、レバーの1個1個にも相当詳細に情報をとったうえで再現しています。社員が叫んだり、動作確認をしたりしていますが、あれも、福島第一の関係者やほかの原発の関係者への詳細な取材に基づいて作っています。

映像化したことで「あの現場で何が起きていたのか」ようやく事の本質が理解できたという視聴者の方々がたくさんいたので、無駄ではなかったかなと思っています。

吉田 原子力の脅威を視聴者に理解してもらうには、あの方法しかなかったにしても、それを再現し撮影するときの迷い、抵抗があったと思いますが、如何ですか？

鈴木 中央制御室については、事故のときに運転していた人やかつての運転員に取材をして、どんな状況ならどの計器を見るですとか、この計器がこの数値を表したらかなり危険であるとかは、もちろん分かったうえで演出しました。でも、極めて複雑なので、俳優さんが発電所の仕組みを理解してそれを演技に落とし込むというのは難しかったようです。どのレベルの技術力の人であれば、どういう認識をもつのかということを引き出すのは大変でした。



中村 直文 さん（なかむら なおふみ）

NHK 大型企画開発センター チーフ・プロデューサー

1969年福岡生まれ。九州大学卒業後、94年NHK入局。大分局、報道局でディレクター、プロデューサーとして番組を制作。主な作品にNHKスペシャル「マリナ アフガニスタン・少女の悲しみを撮る」「トラック列島3万キロ」「靖国神社 占領下の知られざる攻防」「38分間 巨大津波・いのちの記録」「釜石の“奇跡”」「シリーズ未解決事件」など。

鈴木 章雄 さん（すずき あきお）

NHK 大型企画開発センター ディレクター

1977年東京生まれ。早稲田大学卒業後、2000年NHK入局。金沢局、報道局でディレクターとして番組を制作。主な作品に NHKスペシャル「原発解体」「シリーズ原発危機」「メルトダウン File.1～3」など。



目を凝らしていれば見えてくる

吉田 これまでの放送文化基金賞では、広島、長崎の原爆をテーマにした作品が数多く受賞してきました。戦後68年になるにもかかわらず、それでも毎年のように高い評価を受けているのは何故か。今年の実賞作『黒い雨～活かされなかった被爆者調査』をとおして考えたいと思います。

日本におけるテレビドキュメンタリーを発展させてきた大きな要因は、広島、長崎に投下された原爆にあることは否定できません。被爆者に対する米国政府、そして日本政府の責任を追究する過程で、ドキュメンタリー作品が培ってきた調査の方法が、日本のドキュメンタリーを強靱にしてきたといっても過言ではありません。毎年原爆と向きあう立場にある広島のスタッフとしては、こうした歴史を継承していく

重みを感じざるを得ないと思いますが、如何ですか。

井上 広島では、毎年8月6日にNHKスペシャルを放送しているのですが、放送が終わった次の日から、次の年にむけて、何をするのかは分からないけれど、とにかく動き出すんです。被爆地の放送局は作り続けなければいけないと思っているのですが、何もなくてほじくりだしているのではなくて、目を凝らして色んなものを見ていると次々とやらなければならないことが見えてくる。逆に言うと、やれてないことが圧倒的に多いということが、やればやるほど分かってくるんです。

しかも、福島原発事故が起きた後は、広島、長崎に蓄積されたものが、今知りたいことになりました。放射線が人体にどう影響を及ぼ

吉田 喜重 さん（よしだ よししげ）

テレビドキュメンタリー番組審査委員長



すのかということを示せるのは広島、長崎の膨大なある種の人体実験ともいえるべき体験、積み重ねられたデータと証言であると思います。

吉田 NHK、および民放がつくった広島、長崎の被爆についてのドキュメンタリーを数多く見てきましたが、いまもっとも強く感じるのは時間の流れです。

初期の頃の作品は、被爆者の方たちに取材し原爆の悲惨さを直接訴えることだった。それが半世紀以上も過ぎると、被爆された方たちが80代、90代と高年齢化し、やがて原爆を体験した方が誰もいなくなるでしょう。そのとき残るのは被爆者の皆さんのデータ、それだけが証拠として生き残っていく。どれだけの人たちが被爆に苦しみ、何を訴えようとしたのか、それ



井上 恭介 さん（いのうえ きょうすけ）

NHK 広島放送局 報道番組チーフ・プロデューサー

1964年生まれ、京都育ち。東京大学法学部を卒業後、1987年NHK入局。静岡局、報道局、大型企画開発センター、広島局などで報道番組のディレクター、プロデューサーとして番組を制作。主な制作作品に、NHKスペシャル「才願ヒ オ知ラセ下サイ〜ヒロシマ・あの日の伝言」「自動車革命」「マネー資本主義」「原爆投下 活かされなかった極秘情報」、主な著書に「ヒロシマ 壁に残された伝言」「里山資本主義（共著）」など。

を表現するには、残された資料から読み取るしか方法がなくなるでしょう。

ここ数年の原爆にかかわるドキュメンタリーも、新たに発見された資料が基になってつくられています。今回の経緯をお話ください。

井上 長崎に本田さんという医師がいて、彼は「自分のところに黒い雨を浴びて体調不良を訴える患者さんが大勢来るのに、調べられていない。そんなことがあるのだろうか。」と長年疑問を抱かれています。それでネットであても無く検索をしていたら、放射線影響研究所の内部向け報告書を見つけられたんです。そこには黒い雨を浴びた人に、被爆特有の症状がでたことが集計された数字とともに記載されていました。本田さんが放影研に問い合わせ色々やりとりがあった結果、突然、放影研の方からマス

コミに向かって、データの公開がありました。それで、私たちもこのデータは一体何なのか、というところから取材を始めました。

すでに記憶の風化が始まっている

吉田 日本の放射線影響研究所は米国の研究機関 ABCC の資料を引き継ぐと同時に、米国同様に黒い雨による二次被害を伏せようとした。それが福島の原発事故でもまた、広島での隠蔽してきた被爆の歴史が繰り返されていることを、『黒い雨』と『メルトダウン』はともに訴えている。

広島、長崎、そして福島があたかも合わせ鏡で見るように、被爆国でありながら原子力の脅威から眼をそらそうとしてきた姿を映し出しています。半世紀以上にもわたる長い時間をとおした遠近法で、それを追究できるのは公共性のある NHK だけでしょう。それに答えるような作品を制作されたことに感謝したいと思いますが、さらに File.4 が準備されているのでしょうか？

中村 そういう期待を頂いていますし、それが私たちの責務だと思っていますので、出来る限り続けていこうと思っていますし、File.4 についても準備を進めています。

私自身は広島番組には携わったことはないんですが、戦争番組を何本か制作していて、まさに、同じ構図だと思ったのは、映像や音声ほとんど残っていないんですね。でも、作る側がアプローチをやめてしまうと何も伝えられない。

福島原発の事故についても、早くも記憶の風化が始まっています。映像や音声にとどまらず、あらゆるデータや資料を発掘して真相に迫るといふ作業を今後も必死にやっていかなくてはならないと思っています。

鈴木 今回の事故の本質的な被害はどこかと、いつも考えているんですが、今回の事故で亡くなった方はたくさんいると捉えているんです。NHK が調べただけでも、避難することによって病院に入院されていた方が 100 人以上亡くなっています。原子力の安全というものは、避難も含めて人的な被害を出さないというのが大前提なはずですよ。私はこの方たちも直接的な死者だと思っています。しかし、原子力の関係者や政府は、なかなか認めようとはしません。そこに非常に大きな問題点があると思っています。風化が進むのも、この事故によって亡くなった方がこれだけいるということ、重さとして皆さんに伝えきれていないからだと思うのです。

マスメディアの責務を果たすとき

吉田 国や公的機関が情報の大半を保持している中で、メディアがどのようにアプローチしていくか、それがもっとも大事な問題です。

日本は民主主義国家ですから、国家そのものは我われ自身がつくった国家ですが、しかし法治国家である以上、政府に権力が委ねられてしまう。従って政府を批判するには個人の力には限界があり、テレビや新聞のもっている言論の力に依存するしかない。それだけにマスメディアの果たすべき責務は重いものがあります。

しかし今回の『メルトダウン』を見た視聴者の多くは、メディアの取材活動にも限界があることを痛感したはずですよ。こうしたメディアの限界に対する新たな問題意識が、『メルトダウン』によって鮮やかに見えてきた年でもあったと思います。

中村 メディアの役割がそれだけ大きいのだとすれば、こちら側にデータや資料を読み解く力がい

と思うんです。例えば、数字の持つ意味が分かった時に初めて事態の本質が分かる。確かに情報は国家や企業が握っている。でも、出ている情報もあるにはあるんですね。ただそれを読み解く力がないと、誰もその事に気付けない。気付かない。これは広島もそうだと思うのですが、私たち自身が読み解く力をちゃんと持てるかどうか益々問われているんだと思います。

鈴木 広島の『黒い雨』もそうですが、数字は嘘をつかないんですね。これは本当に悲しいことなんです。放射能はそんなに短い時間では消えないんです。放射能が未だに発電所の中にあるということは、その数字があの時何が起きていたのかということを示す資料に今後なっていくと思います。事故当時のメモや初期の被爆のデータがあるはずなんです。そういうデータや資料に対してアプローチし、それを読み解いて、

あの時の真実を伝え続けていかなければいけないと思っています。

井上 『黒い雨』の大きなテーマでもあるんですが、分からないということや、知らされていないということが、いつの間にか無いことになってしまう。そこが一番危ないところで、「分からないことはまだ分からないのだ」ということを言い続けたいいけないし、明らかにしないといけないと思っています。

長い間ずっと見てきたからこそ分かることもあります。広島、長崎にはまだまだやるべきことがあると思います。

吉田 不幸をもたらしたからこそ、原爆、原発をテーマにした作品が日本のドキュメンタリーを牽引してきました。それを証明するような作品をつくられた皆さんに感謝したいと思います。

「NHKスペシャル メルトダウン File.3 原子炉“冷却”の死角」

東京電力福島第一原発の事故が、なぜどのように起きたのか。そして、どう事故対応したのか。事故から2年たったが、いまなお謎と課題は残されたまま。メルトダウンを防ぐための“冷却”。3号機では、冷却装置が止まったあとの最後の切り札「消防車のよる注水」で膨大な量の水が実は別ルートに漏れていた。事故は本当に防げなかったのか。事故の教訓はどこまで生かされているのか検証した。

「NHKスペシャル 黒い雨～活かされなかった被爆者調査～」

原爆投下直後の広島、長崎で、大量の放射性物質を含む「黒い雨」にあった1万人を超える被爆者のデータが、2011年12月、突然公開された。データは、放射線の人体への影響を科学的に明らかにするためにアメリカの研究機関 ABCC が集め、研究を引き継いだ放射性影響研究所が保管していた。なぜ研究に活かされなかったところか、その存在すら明らかにされなかったのか。データは何を語るのか。見えない放射線の脅威に正面から向き合えるのかを問う。